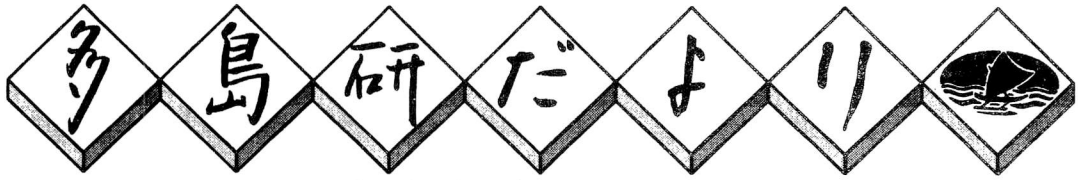


Kagoshima University Research Center for the Pacific Islands



No. 45

鹿児島大学多島圏研究センター

2003年9月

## 泡 瀬

—琉球士族の手がけた海洋開発—

鹿児島大学水産学部 野 呂 忠 秀

沖縄市泡瀬（あわせ）。薩摩藩が琉球王府を支配していた幕末の話である。職にあぶれた首里の士族たちがこの泡瀬に移り住み、海辺の湿地帯を開墾して農業を行なうかたわら、遠浅の干潟に塩田を作り上げた。帰農士族の開拓地は沖縄の各地にあるが、中でも泡瀬は士族の割合が高く、明治の初めには300戸2千人の集落となっていた。

かつての泡瀬は製塩を基幹産業とする村であった。入浜式とよばれるその製塩方法は、広い干潟を巧みに整備した遠浅の塩田に潮の干満を利用して海水を引き込み水分を蒸発させ、本島北部の山原（やんばる）から山原船で運んだ薪を燃料として煮詰めるものであった。昭和初期には沖縄の塩田は10ヶ所ほどあったが、泡瀬は県内の塩の4割を生産する製塩の村であった。

ちなみに、泡瀬では製塩の外に砂糖樽の製造も戦前まで盛んに行なわれていた。この黒糖樽の原料となる材木は国頭や八重山、奄美大島から運ばれたが、帯竹にした真竹は鹿児島産のものが利用された。

明治の初めまでは干潟の先の小島に過ぎなかった泡瀬は、百年を経ずして沖縄本島中部における商工業と物流の拠点として繁栄するまでになっ

た。

しかし、沖縄戦は泡瀬の姿を一変させた。昭和20年4月1日に沖縄本島北谷（ちゃたん）村に上陸した米軍は、同3日には泡瀬を焼き尽くした。捕虜となった住民は隣の具志川村などに強制移住させられ、泡瀬は米軍の占領地として鉄条網に囲まれた軍用飛行場となった。

強制移住させられた人々にとって、すぐ目と鼻の先にあるふるさと泡瀬への帰還は悲願であった。泡瀬の軍用地を取り戻し、戦前のような活気のある町を作り上げることを夢見た彼ら泡瀬出身者は、昭和23年に「泡瀬復興期成会（以下、期成会）」を組織し、軍用地の返還と泡瀬内海の埋め立て運動を展開した。

期成会の活動が効を奏し、昭和32年には泡瀬港を浚渫した土砂を使った33ha、53～61年には77haが埋め立てられ、強制移住させられていた泡瀬出身者は念願の故郷の地を踏むことに成功した。泡瀬の軍用地も昭和40～45年に段階的に返還されたが、かつての泡瀬島のほとんどは今なお米軍通信基地として立ち入り禁止区域のままである。

期成会は、現在会員数8千人（そのうち5千

人が泡瀬居住者、これは沖縄市泡瀬地区の現住民の1/3に相当する)の組織に成長した。彼らは泡瀬に戦前住んでいた人々とその子孫である。また、その財源の多くは軍用地代を共同管理したものである。年始会・長寿者(カジマヤー)祝賀会・泡瀬まつりの開催、拝所(オガミドコロ)や自治会館の運営、泡瀬の開発計画についての勉強会など、その活動は活発である。機関誌「みち潮」や村誌「泡瀬誌」、写真集「ふるさと泡瀬」などの書籍の出版、戦火で失われた戦前の記録の収集も行なっている。また期成会は泡瀬出身者の子弟に対して奨学金を給付しているが、鹿児島大学の学生の中にもその恩恵を受けた者もいる。

この泡瀬に再び埋め立てが計画されている。これは、中城港の浚渫土砂を用いて泡瀬半島(明治時代の泡瀬島)の回りにリゾート地を作ろうとするもので、平成元年に沖縄市東部海浜地区開発計画として沖縄市が発表した。しかしこの計画は、ゴルフ場をメインとするリゾート開発であることや干潟への影響が大きいことを理由に、期成会はその構想に反対していた。その後、沖縄市は期成会の意見を取り入れ、埋め立てを出島方式に変更することによって地元住民の賛成を得、期成会もこの計画を積極的に支持している。泡瀬干潟185haが埋め立てられる計画は、市議会の承認を経て沖縄県知事の許可するところとなったが、生態系への影響が大きいことを理由に、「泡瀬干潟を守る会」や「日本自然保護協会」、「世界自然保護基金ジャパン」などが、内閣府沖縄総合事務局や国土交通省を相手に埋め立て反対運動を展開している。

埋め立てによってジュゴンの餌になる海草が失われること、埋め立て地の海草を移植することに問題があること、干潟には希少生物トカゲハゼ(ムツゴロウの仲間)や、固有種の高藻クビレミドロが分布すること、渡り鳥にとって東

南アジアと日本本土の中継地であることが、埋め立て反対論者の主張するところである。対する事業者側はこの埋め立て事業に雇用の創出と地域の再開発をかけている。期成会を含め泡瀬の人々の多くはこの埋め立てに条件付きではあるが賛成しているのに対し、反対の声は沖縄市以外や県外から響いてくるといった事情がこの埋め立て問題を複雑にしている。

泡瀬の沿岸は生活排水や農業廃液による水質汚染が著しく、地元住民はこの干潟で採取された魚介類を食べたがらない。海岸の湿地帯が失われ自然浄化力が低減したことや、人口の増加に下水処理が対応していないことなどが原因で

戦前の泡瀬を知る泡瀬人にとって、アシの生い茂る海岸の湿地帯や、その沖合いに広がる干潟と手入れの行き届いた塩田風景は、沖縄の海と空の青さとマッチした思い出深い原風景であるという。

今、泡瀬の人々は人工島を作ることによって、若者の町北谷(観光地)や、夜の町旧コザ市(歓楽地)とは違った、亜熱帯の気候を利用した退職者がのんびり暮らせる自然と調和した落ちついた町を作り出そうとしている。これが、泡瀬流の海洋開発なのかもしれない。

#### [参考文献]

荒木晴香(2002)泡瀬のアイデンティティと復興期成会。『開発と環境の文化学』榕樹出版、沖縄県浦添市。209-222。/泡瀬復興期成会(1996)『写真集ふるさと泡瀬』泡瀬復興期成会。275頁。/泡瀬復興期成会(2003)『縮刷版期成会だより、みち潮、昭和50年～平成15年』泡瀬復興期成会。223頁。/仲里嘉彦監修(1999)『沖縄市の今昔・夢未来、沖縄市制二十五周年記念』春夏秋冬社、沖縄県浦添市。620頁。/日本自然保護協会(2003)世界の宝泡瀬干潟を未来の子どもたちに引きつぐために-泡瀬干潟シンポジウム報告書、日本自然保護協会、世界自然保護基金ジャパン、日本野鳥の会、190頁

## 平成15年度多島研プロジェクト 「離島の自律的発展のための学際的研究」

多島圏研究センターでは、平成11年に総合研究プロジェクト”多島域における小島嶼の自律性”を開始した。プロジェクトは多島圏研究センターの専任・兼務教官がそれぞれの専門領域を活かしつつ各自の研究課題を実施してその成果を挙げると共に、得られた成果を有機的に連携させ、総合する事によって、“小島嶼の自律性”を可能にするための条件を探る事を目的にしている。

小島嶼の自律性とは、小島嶼における不十分な人的・自然的資源問題を克服し、多様な自然環境や社会文化的な特性を維持しながら、多島域内の他の島嶼あるいは域外の地域と関係を維持しつつ、長期的に安定した島嶼社会の運営を行うことを言う。

本年度の具体的な研究項目は以下の通りである。  
**医療分野：**離島における福祉・保健医療の現状を明らかにするとともに、基礎医歯学的研究も行い、医療分野の問題点を示し、提言する。  
**農業分野：**島嶼域に分布する動植物物資源の探索を行い、遺伝資源マップを作成するとともに、それらの遺伝資源の保存、農業面での活用をはかる。さらには、東南アジア等の熱帯地域から有用遺伝資源を導入し、島嶼域における適応性を評価し、栽培利用技術を確認する。  
**水産業分野：**種子島と屋久島周辺に分布する水産資源の有効活用のための基礎的研究を行う。特に、熊毛海域特産のトコブシの資源管理（放流、育成、漁獲、加工、流通）に関する研究と調査を行うことによって、沿岸漁業の振興を図る。  
**環境分野：**鹿児島島の島嶼域における動植物に関する分布域や生育様式に関するこれまでの基礎調査に関する資料の収集・分析を行うとともに、未調査地域について、基礎調査を開始する。  
**社会分野：**人文科学（考古学、人文地理学、文

化人類学、歴史学、言語学等）及び社会科学（政治学、経済学、社会学、教育学等）の側面から、離島の自立的発展についての現地調査を行い、データベースの作製を行うとともに、その成果を報告書にまとめ、地域に還元するためのシンポジウムの開催や具体的政策提言に努める。

また、このプロジェクトの一環として、以下の勉強会を開催した。

### 第1回 与論勉強会

2003年6月23日（月）

総合教育研究棟5階ホール

#### 1. 与論の海

河合 溪

(鹿児島大学多島研)

#### 2. 与論の農業

富永茂人

(鹿児島大学農学部)

#### 3. 与論の文化

桑原季雄

(鹿児島大学・法文学部)

### 第2回 与論勉強会

2003年7月22日（月）

総合教育研究棟201号室

#### 1. 与論の歴史と文化財

麓 才良

(与論町文化財保護審議委員会委員長)

#### 2. 離島医療から離島で癒す医療へ

古川誠二

(医療法人誠友会理事長)

#### 3. 与論の水産業

池田 勝

(与論町漁業協同組合組合長)

## 多島圏研究センター研究会

### 第38回

2003年3月3日(月)  
総合教育研究棟201講義室

### 化学発がんの感受性を左右する遺伝要因について -ラット舌がんモデルでの解析-

北野元生  
(鹿児島大学歯学部)

Dark-Agouti (DA) 系ラットは 4-nitroquinoline 1-oxide (4NQO)-誘発舌がんに対して高感受性を示し、反対に Wistar/Furth (WF) 系ラットは感受性が極めて低い。この両系ラットの 4NQO 誘発舌がんを化学発がんのモデルとして、遺伝要因を解明する目的で simple sequence repeat length polymorphism 解析 (QTL 解析) を行った。まず両系のラットを交配して130匹の F2 ラットを作成し、発がん実験を行った。発生した舌がんの大きさと数を指標として、PCR 法を応用した QTL 解析を行ったところ、5つの QTLs が舌癌発生に重要に関わってくることが分かった。ほかにも弱い関与が疑われる3つの OTLs を認めた。舌がん発生についても、ほかの部位のがんと同様に、多くの遺伝子が錯綜して関与しているものと理解される。

### 第39回

2003年4月21日(月)  
総合教育研究棟201講義室

### 真夏にも生育している種子島の海苔の生態

寺田竜太  
(鹿児島大学水産学部)

紅藻アマノリ属は、日本各地で採取や養殖が

おこなわれている有用海藻である。本属は、一般に初冬から春の間のみ生育し、冬の間海苔養殖は日本の風物詩となっているが、近年は夏から秋の高水温の影響で養殖開始時期が遅れており、高水温耐性種の作出等が求められている。タネガシマアマノリ *Porphyra tanegashimensis* Shinmura は、日本で唯一の熱帯性アマノリだが、原記載以後の存在や生態の詳細については明らかになっていなかった。今回は、通常の間海苔ではありえない「真夏にも生えている」本種の個体群動態を紹介し、夏季の高水温にも個体群が維持される要因と他の熱帯性アマノリ属との分類、島嶼域有用資源としての本種の利用や保全についての展望について論じた。

### 第40回

2003年1月20日(月)  
総合教育研究棟201講義室

### 暮らしのなかの有用植物 -東南アジア島嶼部におけるジュズダマ属の事例から-

落合雪野  
(鹿児島大学・総合研究博物館)

ジュズダマ属 (*Coix* L., イネ科) は、薬用や装飾用に使われるジュズダマのなかまや、穀類のハトムギが含まれる、人とかかわりの深い植物群である。その分布域はインドや東南アジア大陸部を中心に、世界の熱帯、亜熱帯に広がっているが、なかでも多くの種類が特徴的な方法で利用されている地域として、東南アジア大陸部とニューギニア島が注目される。

それでは両地域の間位置する東南アジア島嶼部では、ジュズダマ属植物がどのように利用されているのだろうか。本講演では、さく葉標

本調査やフィールドワークをもとに、東南アジア東部島嶼域の人々の日常生活におけるジュズダマ属植物の役割について、民族植物学の視点から報告した。

## 第41回

2003年6月16日(月)

総合教育研究棟201講義室

### Challenges for volcanic cloud monitoring in the western Pacific

Andrew Tupper

(鹿児島大学教育学部)

Over the past 21 years, many dangerous encounters between passenger aircraft and volcanic ash clouds have occurred. Volcanic ash can stop aircraft engines during flight, and causes extensive damage to windows, wings, and other surfaces of the aircraft.

During the 1990s, an international network was developed to warn for volcanic ash clouds. The network, the International Airways Volcano Watch, is based around the national meteorological and aviation agencies, with nine centres around the world serving as central locations for making forecasts of ash cloud movement. The western Pacific is covered by centres in Australia, New Zealand, the U.S.A. and Japan.

In the Pacific, most countries do not have enough resources for volcanic monitoring. Parts of the tropical Pacific are not only among the most volcanologically active in the world, but are also the most meteorologically active, with very high sea surface temperatures contributing to deep tropical moisture and daily thunderstorms. The available moisture in the tropics makes volcanic clouds higher and also more difficult to detect with

remote sensing than in the mid-latitudes.

Kagoshima is an ideal place to practise volcanic cloud observation techniques, and to learn about volcanic cloud / atmosphere interactions. The lessons learned in Kagoshima can be applied for countries throughout the tropical Pacific and Indian Oceans.

## 第42回

2003年7月14日(月)

総合教育研究棟201講義室

### カント研究から南の島々に魅せられて

細谷章夫

(鹿児島県立短大・名誉教授)

前半では私の専門であるカント哲学の話をし、後半は新カリキュラム実施により、南の島々の調査に参加することになった経由、およびその映像を紹介した。

カント哲学に関しては、哲学の一般的な研究の傾向、カント哲学の特徴的な側面（・科学的な基礎にもとづいた新しい形而上学の追求、そのために認識論、あるいは科学論という分野への道を開いたこと、・その結果、私たちの知識のうちにア・プリオリなものが存在するとのカントの主張、その1つの例として「因果法則」によって、ア・プリオリな意味の説明をした。・ニュートン力学のカントへの影響など）と非ユークリッド幾何学の出現にみられるようなカント哲学では説明しきれない問題について論じた。

当研究所の前身「南海研」のグループに入れていただき、1995年のパラオ調査に参加した。そのときのVTR（マングローブ、カヤンゲル島）、それ以外に個人で調査したときのVTR（インドネシアの人形劇、チュアンジュラン[スダダ地方の唄]）などを紹介した。

---

## 最近の出版物

---

Occasional papers No.38 (February 2003)

The progress report of the 2000 and 2001 survey of the reserach project “Social homeostasis of small island-zone”; Islands in southern Japan (Edited by NODA Shinichi)

Occasional papers No.39 (July 2003)

The progress report of the 2000 and 2001 survey of the reserach project “Social homeostasis of small island-zone”; Yap proper and Ulithi Atoll, Micronesia (Edited by AOYAMA Toru)

---

## 多島圏研究センター専任・兼務教官の海外出張および研修記録 (2003年2月～2003年9月)

所属	氏名	期間(開始)	期間(終了)	国名	用務
法文学部	新田栄治	H15. 2. 6	H15. 2. 9	タイ王国	シンポジウム出席
法文学部	徳丸亞木	H15. 2.23	H15. 4.28	中華人民 共和国	日本社会に関する講義・北京日本学 研究センター運営への協力
農学部	米田 健	H15. 2.23	H15. 2.28	マレーシア	「平成14年度熱帯林の炭素循環 の変動推定に関する研究」の現地 調査
法文学部	皆村武一	H15. 2.26	H15. 3. 4	ドイツ	ミュンヘン大学との学術交流協 定締結のため
農学部	米田 健	H15. 3. 1	H15. 3.13	タイ王国	熱帯林の炭素循環の変動推定に 関する研究の現地調査
教育学部	木下紀正	H15. 3.15	H15. 3.22	中華人民 共和国	中国長春市における黄砂研究と 物理教育についての研究連絡
工学部	土田充義	H15. 3.15	H15. 3.24	中華人民 共和国	中国古建築の調査および湖南大 学との学術協定の更新
法文学部	新田栄治	H15. 3.27	H15. 4. 3	ヴェトナム	ヴェトナム考古学の調査研究
理学部	市川敏弘	H15. 4.12	H15. 4.16	中華人民 共和国	国際会議出席

---

所 属	氏 名	期間(開始)	期間(終了)	国 名	用 務
生命科学 資源開発 研 究 センター	田浦 悟	H15. 4.21	H15. 5.24	ヴェトナム	シラハガレ病抵抗性品質作出 (国際協力事業団派遣)
水産学部	市川 洋	H15. 4.27	H15. 4.30	大韓民国	PICES (北太平洋海洋科学機関) への参加および招待講演、研究 打ち合わせ
水産学部	江幡恵吾	H15. 5. 7	H15. 5.16	大韓民国	漁具試験実習
法文学部	尾崎孝宏	H15. 5.14	H15.11.12	モンゴル	文部科学省在外研究員
理 学 部	鈴木英治	H15. 5.18	H15. 6. 1	ブルネイ	ボルネオ島熱帯雨林の多様性維 持機構の研究
理 学 部	根建心具	H15. 6. 4	H15. 7.30	オースト ラ リ ア	科研費「原始地球の遊離酸素と バイオマーカーに関する国際共 同研究」遂行
法文学部	徳丸亞木	H15. 6.19	H15. 7.14	中華人民 共 和 国	日本社会に関する講義・北京日 本学研究センター運営への協力
農 学 部	岡本繁久	H15. 6.20	H15. 6.30	ス ペ イ ン	第7回国際植物分子生物学会で の研究発表
教育学部	木下紀正	H15. 6.21	H15. 6.29	フィリピン 共 和 国	フィリピン火山現地調査 (IUGG 2003Pre-Conference Fieldtrip)
理 学 部	鈴木英治	H15. 7.20	15. 8.28	インドネシ ア 共 和 国	ボルネオ島熱帯雨林の多様性維 持機構の研究
法文学部	新田栄治	H15. 7.26	H15. 8.14	タ イ 王 国	「メコン流域における金属資源 とその利用に関する考古学的研 究」の現地調
農 学 部	衛藤威臣	H15. 7.27	H15. 8. 6	連 合 王 国	「ニンニクの祖先種の解明」ニ ンニク祖先種の解明に関して、 イギリス・キュー植物園にて討 議、収集材料の同定
法文学部	黒田景子	H15. 7.27	H15. 8.11	マレイシア ・タイ王国	ペナン州における国際会議研究 発表および研究打ち合わせ・資 料収集
法文学部	西村 知	H15. 7.31	H15. 9.15	フィリピン 共 和 国	フィリピン稲作農村に関する調 査および資料収集

所 属	氏 名	期間(開始)	期間(終了)	国 名	用 務
農 学 部	米 田 健	H15.8.7	H15.8.31	マレーシア ・タイ王国	熱帯雨林の分解系から出る二酸化炭素フラックスに関する研究の現地調査
多 島 研	河 合 溪	H15.8.11	H15.9.26	フ ィ ジ ー 共 和 国	研究調査
水産学部	野呂忠秀	H15.8.16	H15.8.30	フィリピン 共 和 国	拠点大学方式によるフィリピン大学ピサヤス校での共同研究
理 学 部	大塚裕之	H15.8.17	H15.8.28	中 華 人 民 共 和 国	脊椎動物化石の研究
総合研究 博 物 館	落合雪野	H15.8.19	H15.8.29	ラ オ ス	研究プロジェクト「アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史モデルの構築」に係る研究打ち合わせおよび予備調査

---

多島研だより No. 45 平成15年9月25日発行

発 行：鹿児島大学多島圏研究センター  
〒890-8580 鹿児島市郡元1-21-24  
TEL：099 (285) 7394  
FAX：099 (285) 6197  
E-mail: tatoken@kuas.kagoshima-u.ac.jp  
WWW: <http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/>

---